SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

国語教科書教材基礎研究：「山へ行く牛」の考察を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007347

国語教科書教材基礎研究
――「山へ行く牛」の考察を通して――

A Researching Takashi Kawamura
through Japanese Language Teaching Materials “Yama he iku Ushi”

大　塚　　浩
Hiroshi OHTSUKA

（平成 24 年 10 月 4 日受理）

はじめに

川村たかしは、昭和６年11月８日、奈良県五條市に生まれている。昭和25年、奈良県立五條高等学校を卒業後、家業の農業に従事した。しかし、翌年の昭和26年、奈良学芸大学（現、奈良教育大学）に入学した後、同人誌「アラベスク」に参加し、文学作品を手掛けるようになる。また、昭和35年には、花岡大学らと共に同人誌「近畿児童文化」の設立同人になり、本格的に児童文学の創作執筆に取り組むようになったのである。

川村は、昭和37年に奈良県五條中学校教員、昭和48年に奈良教育大学非常勤講師として児童文学講座を担当、昭和49年からは奈良県五條高等学校定時制教員として教壇に立ちながら創作活動に従事した。その後、梅花女子大学教授として研究と教育に携わりながら執筆活動を続け、多くの作品を世に送り出している。

作品「山へいく牛」は、昭和47年８月１日に「日本児童文学」８月号（盛光社刊）に発表したものが初出である。同年11月に「山へいく牛」を含む計八編と併せて収載された『偕成社の創作文学　山へいく牛』（偕成社刊）が、作品「山へいく牛」の初刊本となる。この『山へいく牛』は、昭和53年11月に、国際アンデルセン賞優良作品賞を受賞している。川村はその他にも、野間児童文芸賞、路傍の石文学賞、産経児童出版文化賞大賞、日本児童文芸者協会賞を受賞している。また、昭和56年には、那須正幹らと共に、児童文学創作集団「亜空間」を結成し、季刊誌「亜空間」を創刊している。平成10年には、日本児童文芸家協会の第三代会長に就任、平成14年には紫綬褒章を受賞、平成22年１月30日、78歳で逝去した。

国語教科書教材としての「山へ行く牛」は、昭和52年度版『小学校国語･六年下』（学校図書）に採録されたものが緒である。教科書テクストとしての「山へ行く牛」は、初刊本である『偕成社の創作文学　山へいく牛』を底本とした上で、作者である川村たかし自身が一部修正を施したものであった。

そこで本稿では、「国語教科書教材基礎研究」の一環として、「山へ行く牛」の成立過程、作品「山へ行く牛」と時代性、「好きで行くのやないよってに」と「好きで行くのやない」、島子の言葉と父の言葉の重なりについて考察を進めていくものとする。

国語教育講座

Ⅰ.「山へ行く牛」の成立過程

（1）作者と「牛」との関係

川村たかしは、幼少時から農村の大きな労働力である「牛」の重要性について、生活実感を持していた。奈良県の農家で生まれ育った川村は、実生活の中で「牛」と棟続きである曲屋で暮らし、「牛」と共に、日常の同一の時間を過ごしていたのである。

萬屋秀雄は、作者である川村の生い立ちについて、『山へいく牛』の解説において次のように述べている。[1)]

> 川村さんは、昭和六年、奈良県五條市の農家に生まれました。当時の農家において、牛は貴重な労働力であることもあり、家族同様にたいせつにあつかわれていました。川村さんもわが家の牛と兄弟のように同じ屋根の下でくらしていたのです。牛へのひたむきな思いはそんな川村さんの生い立ちとふかく結びついているようです。
>
> 今でも川村さんは「牛が好きだ」といわれます。一見、鈍重に見えますが、そのねばり強さ、頑健さ、やさしさに心がひかれるのでしょう。
>
> このことは、川村さんという作家そのものの性格とも結びついているように私には思えます。川村さんは、今までずいぶんたくさんの作品を書いておられます。（　中　　略　）十年近くのあいだにこれほどたくさんの作品を書く川村さんの創造的エネルギーの大きさと持続力に、まず脱帽させられます。しかもそのほとんどが、入念な取材をもとにじっくり構想をたてて書く本格的な作品ばかりです。ですから、作品のできばえはそれは堅実で読みごたえのあるものばかりがそろっているのです。流行をおったり見せかけのきらびやかさはないが、氏のペースで氏の持ち味を存分に生かして着実に自分の世界を拓いている誠実な作家といってよいでしょう。筋金入りの作家魂の持ち主として今や貴重な存在になりつつあるのです。

萬屋は、作品中に登場する川村の「牛へのひたむきな思い」は、人間と牛の両者が共に労働し、共に汗する日常生活に中で育まれた川村自身の「生い立ちとふかく結びついている」と指摘している。さらに、川村の牛に対する思いは、「一見、鈍重に見えますが、そのねばり強さ、頑健さ、やさしさ」に心が惹かれるからでなないかと捉えている。

作者である川村は、「牛」について、次のように述べている。[2)]

> 牛という動物を今どき目の前に据えるのは、遠い過去に存在した風景をひき戻して再生するに過ぎない、と思うのは誤っている。牛はかってどの農家にも飼育されており、最も大衆に近い動物の一つだった。耕牛としての牛がいなければ農作業はさまにならなかったし、堆肥としての糞尿の役割も大きかった。時には荷車を曳き、材木の搬出にも使われた。車の入らない山道を曳かせるのである。それらの役牛としての「牛」が、今なお子どもたちにわかるらしい。とても三十数年前に姿を消し去ったとは思えない親しさで迎えられるのは、今も乳牛、肉牛として飼育される姿を何かの折にかいま見るせいだろうか。
>
> 見落とせないのは、牛が農家の中で果たしていた経済的効果である。種付けをして子を生む。生まれた子牛が雌牛であれば赤飯を炊く家もあったくらいで、三年連続して幸運のつづいた家では家を新築した。基金となるほどまとまった金が入るためである。雄は捨て値でひきとられた。
>
> それとは別に肥えた牛はやせ牛とひき替えに、“負い銭”をもらう。若牛を育てて応分の金を受け取り、再び子牛と交換することもあった。定期的に仲買人が巡って来ては様子を見

て帰って行く。ころ合いを見はからって赤い首輪をつけた牛を連れて、交換を勧めにやって来る。赤い首輪は盗んだ牛でないことを表していた。

ここで川村は、「牛という動物を今どき目の前に据えるのは、遠い過去に存在した風景をひき戻して再生するに過ぎない、と思うのは誤っている」と述べ、「役牛」としての牛の存在が、読者である児童・生徒たちに理解された上で、受け入れられていると述べている。さらに、牛が農家の家計の中で果たしていた経済的効果について記している。農家の財政基盤の視点から見ても、牛の存在は人間の生活を支える大きな柱であり、欠くことのできないものであったのである。

（2）「山へいく牛」に込めた思い

川村は、牛への愛着について、次のように述べている。[3)]

農閑期に牛を山村へ貸すというような風習は、ぼくの育った村にはなかった。友人の一人が奈良平野の大和川ぞいに住んでいた。何かのはずみで少年時代のことを話している時、赤い首輪を巻いた牛の群れが紅白の幕で飾られて、大和川の堤を出発するのを聞いた。彼はあまり関心はなさそうだったが、ぼくにはその風景が見えた。ありありと見えたということは、牛そのものへの愛着が初めにあったからだろう。

作家は何かの形で作品の中に自分を塗りこめていく。その原型となるのは直接にしろ間接にしろ幼少体験かと思われる。原体験と呼んでもよい。自らの内に沈潜して濃い部分を核として、作品は膨んでくる。農村に育ったぼくにとって、牛はその代表だった。裸足で土を踏まえて生きるために、無くてはならない相棒だった。

ここで川村は、「作家は何かの形で作品の中に自分を塗りこめていく」と記し、自分自身の作品の原型となるのは、「直接にしろ間接にしろ幼少体験かと思われる。原体験と呼んでもよい。自らの内に沈潜して濃い部分を核として、作品は膨んでくる」と述べている。川村は、自分自身と「牛」との関係を、「裸足で土を踏まえて生きるために、無くてはならない」存在であり、「牛」を自らの「相棒」であると認識しているのである。

川村の過ごした幼少時代、「牛」の姿は、まさに「生産」を想起させるものであったと考えられる。共に田畑を耕し作物を生産しながら、自然の恵を戴いていた人間の生活は、「牛」という存在が人間の生活の中で共生していたからこそ成り立っていたといっても過言ではないのである。

川村は、作品「山へいく牛」について、次のように述べている。[4)]

農家の子どもが薪で飯を炊くことを知らず、麦という食物を知らず、手でする田植えを知らず、当然ながら牛を知らず鶏さえも知らない。何よりこわいのは生産する喜びの代わりに、儲けに短絡することを子どもが無批判に継承していくことであろう。金儲けも大切だし、労力を軽減するために機械を導入することも大事だが、土への愛着、植物や動物への親近感、畏敬の感覚は遮断された。かつて土と人間の間に立って双方を連続させていた「牛」がいなくなった時から、多くの農民は牛を金の同意語として受け取り始めた。

現代児童文学は多種多様な形を探りながら拡大しつつある。その流れの中心は“軽み”であり題材はホームドラマが多い。その分野も大切だが、未来を生きる子どもたちの物語に、壮大なドラマ、詩情あふれるロマンを呈示したいと、ぼくは思う。そしてそれらの作品群が、コンクリートでなく「土」から養分を取っていることを前提にしたい。

「山へいく牛」に感動して涙を流して読み、牛の体温を身近に感じることができる人間、

人はまだ土に繋がっていると思う。逆に牛の物語が過去の遺物となり果てる時、日本民族はもう滅びの道に踏みこんでいるともいえよう。

その意味で、悲しいことだが「牛」は現在、文明のリトマス試験紙の役割りを果たしている。

川村は、「牛」を必要としなくなった生活形態の変化は、農家の子供達の心に大きな影響を及ぼしたと考えている。川村は、時代の推移に伴い、農業に機械化が導入されたことにより、「土と人間の間に立って双方を連続させていた『牛』がいなくなった時」から、子供達の心奥に「土への愛着、植物や動物への親近感、畏敬の感覚は遮断された」と嘆き、警鐘を鳴らしているのである。

さらに川村は、「『山へいく牛』 に感動して涙を流して読み、牛の体温を身近に感じることができる人間」は、「まだ土に繋がっている」と思うと捉えた上で、「その意味で、悲しいことだが『牛』は現在、文明のリトマス試験紙の役割りを果たしている」と述べている。

川村たかしは、「山へいく牛」を執筆することにより、「進化」という名の下に効率化を目指す人間社会から失われつつある「心」を、自分自身の作品の中に残存させようとしていたのではないだろうか。

Ⅱ．作品「山へいく牛」と時代性

作品「山へいく牛」は、昭和47年８月１日に「日本児童文学」８月号（盛光社刊）に初めて発表された。同年11月に「山へいく牛」を含む他七編と併せて収載された『偕成社の創作文学山へいく牛』（偕成社刊）が、作品「山へいく牛」の初刊本となる。小学校国語教科書教材としては、昭和52年度版『小学校国語・六年下』（学校図書）に収載された「山へ行く牛」が初掲載となる。

浮橋康彦は、「山へ行く牛」と戦争について、次のように述べている。[5)]

川村たかしに「山へ行く牛」という作品がある。戦争中、平場農家の牛が農閑期に山の村に雇われて行く話を軸にして、その牛の親子の別れに、父を戦争にとられた島子という村の女の子（小学四年生）が、自分とひきくらべながら痛烈な悲しみを知るというストーリーである。

浮橋は、主人公である島子を「父を戦争にとられた」少女として位置づけ、「牛の親子の別れ」に自分自身と出征した父との別れを対比させながら、「痛烈な悲しみを知る」作品であると把捉している。「山へ行く牛」の本文中には、戦争の悲惨さに関する直接的な描写は認められないが、一家の大黒柱が出征してしまったことにより、残された家族の日常生活に大きな支障をきたしている描写が少なくないことも事実である。

安藤操は、島子の牛に対する思いについて、次のように述べている。[6)]

まず、島子の牛を育てることへのひたむきさとやさしさを読みとらせたい。

子牛の少しの変化をも感じる島子。まっすぐに鼻木入れ式を見つめる島子。山行きをやめるように頼む島子。山での別れにどうしようもない感情で叫ぶ島子。島子にとって牛を育てるということは自分の生き方すべてだったのだ。そんな島子の牛へのひたむきな思いにしっかりと目を向けさせたい。

また、戦争へ行ったまま帰らぬ父への思いを、常に島子の行動とからめて読ませたい。山行きを決心したのも、とうげでどうしようもなくつらくなったのも、みんな島子をおいてき

ぼりにして戦争へ行った父への思いがあるからであるし、この作品が戦争児童文学としての性格を持っているゆえんでもあろう。

さらには、島子をとりまく人々をも大切に見つめさせていこうと考える。特に「島子と牛」という狭い範囲のなかで作品をとらえるのではなく、「戦時中、牛とともに生き、生活する人々。そのなかの島子と島子の牛」として作品を見つめさせていきたいと考える。

ここで安藤は、「島子にとって牛を育てるということは自分の生き方すべてだった」と記している。四年生になってからの島子は、親牛と子牛の世話の一切を任せられており、懸命に委任された仕事に取り組んできたのである。これまで家族の一番の働き手であった父が兵士として出征した後、残された者たちの生活の貧窮は容易に想像することができる。出征した父の留守の間、家族全員が力を出し合いながら、少ない人手で家じゅうの数多くの仕事をこなしているのである。

安藤は、本作品を通して「特に『島子と牛』という狭い範囲のなかで作品をとらえるのではなく、『戦時中、牛とともに生き、生活する人々。そのなかの島子と島子の牛』」という構図で捉えさせたいとしている。

また、岩井幹明は、島子と牛との相互交流について、次のように述べている。[7)]

「山へ行く牛」にも同じことが考えられ、島子の牛へのひたむきな思いが、牛の側からも伝わり、島子をおいて戦争に行っている父への愛が重なって一層深い感動に浸らせるのである。自然界の生物と生きるための人間とのかかわり方も、「自然破壊だ」「公害だ」と叫ばれるなかで、自然との付き合い方にうとい現実の子どもたちに、島子と牛親子、そして島子をとりまく人たちの人間味あふれる心根が、牛育てを通して伝わり、やがて、島子に「マアーッ」を自然にいわせる（牛になっていたと）みごとな必然性など、自然と社会と人間とのかかわりのなかで、命の尊さと愛の強さ、そして生きる厳しさなど、まさに生命感がみなぎっている作品であり、子どもたちにぜひ与えたい、読ませたいと思い、子ども読者の能動的読後に胸をワクワクさせる思いであった。

岩井は、「島子の牛へのひたむきな思いが、牛の側からも伝わ」ると記している。島子が牛に注いでいる愛情は、決して一方的なものではなく、世話をされている親牛や子牛にも十分に伝わっている。同様に、親牛や子牛も、世話をしてくれている島子に対し、深い信頼感を持している。岩井は、「山へ行く牛」を「自然と社会と人間とのかかわりのなかで、命の尊さと愛の強さ、そして生きる厳しさなど、まさに生命観がみなぎっている作品」と評価し、学習者である児童に是非読ませたいと述べている。

立尾保子・藤井英子は、共著の中で島子の悲しみについて、次のように述べている。[8)]

この物語は、農村の生活を背景に、出征する父を見送った主人公・島子と、村のしきたりゆえに冬も休む暇なく山の重労働にかり出されていく母牛の悲しみが重層的に描かれている。目にいっぱい涙をためて永久の別れとなる子牛を置いていく母牛に自分を置いて出征せざるを得なかった父の悲しみを重ね、置いていかれた子牛に自分を重ねた時どうしようもない悲しみ、向けようのない怒りが全身を貫き、島子は牛と一体化し、生命の共感というべき熱い叫び声をあげるのである。命ある者同士のかかわり合いが真実味をもって描かれており、児童は深い感動をもって読み深めていく。その過程で、しなやかな感性でまっすぐに物事を見つめる島子の心が、しだいに高められ、成長していくことに焦点化して人間像を浮き彫りにすることで児童の考え方・感じ方に培っていくことができる。

ここで、立尾・藤井が述べている「どうしようもない悲しみ」とは、本文中に出てくる幾つかの別離に対する悲しみである。島子と戦争に行った父との親子の別れ、島子の母と父との夫婦の別れ、高齢の祖父と父との二つ目の親子の別れ、売られていく子牛と山へ行く母牛との三つ目の親子の別れ、島子と山へ行く母牛との別れ、そしてこれから待ち受けている島子と売られていく子牛との別れがそれである。列挙した六つの別離は、何れも否応もなく訪れ、そして避けては通れない別れなのである。

島子は、こうした「どうしようもない悲しみ」を味わう内に、「向けようのない怒りが全身を貫」くのである。立尾・藤井が述べている「向けようのない怒り」とは、一体何であろうか。それは、どこに向かって表すればよいのか、誰に向けて表すればよいのかさえも判然としない、行き場のない封鎖された怒りなのである。作品中の島子は、母牛と子牛の世話係として、心の底から牛のことを考え、心配している。母牛と子牛との生活を優しく見つめている島子の様子や行動からは、冷静に物事を見据え懸命に対応している姿を看て取ることができる。立尾・藤井は、作品を通して、「しなやかな感性でまっすぐに物事を見つめる島子の心が、しだいに高められ、成長していくことに焦点化して人間像を浮き彫りにする」ことができるのでないかと考えている。

Ⅲ.「好きで行くのやないよってに」と「好きで行くのやない」

（1）島子の言葉「好きで行くのやないよってに」

島子は、母牛を送るために自ら山行きを志願したのであるが、その日の晩には、母牛の山行きそのものを中止して欲しいと、祖父に願い出ている。島子の心の変化について考察を進めていきたい。

島子は、母牛の「おけかぶり」を心配し、芳太郎じいさんに対して、作品中で次のように発言している。[9)]

「おけちゃんは、去年山から帰ってきて、じきにちびを産んだんやで。それから田植えや。やせてしりの骨がとんがるほど働いて、また山行きやもん、休む時があらへんやないか。」

「――――――」

「好きで行くのやないよってに。」

じいさんはだまっていた。

島子のこの言葉は、母牛の労働の苛酷さを物語っている。島子は、母牛と子牛の世話係として、四年生になった四月から一日も欠かさず、間近で親身になって面倒を見てきている。休む間もなく働きずくめのおけかぶりの体調を心配し、「今年だけは」という条件付きの提案であったのである。今春、山仕事から帰ってきて子牛を出産、その後すぐに田植え作業と続き、おけかぶりの体は、「やせてしりの骨がとんがる」程やつれていた。母牛のおけかぶりのやつれ方は、子供の島子の目からしても尋常ではなかったのである。

（2）父の言葉「好きで行くのやない」

島子の発した「好きで行くのやないよってに。」という言葉は、一年前の晩秋、出征の際の父の言葉と符合する。作品の本文には、次のように記されている。[10)]

島子の父が戦争に行ったのは、ちょうど昨年の今ごろだった。駅まで見送りに行った時、父は初めてぐちをこぼした。

「好きで行くのやない。大きな声で言えんが、この年になって、子供を置いていくのは、

つらいわい。」

島子は、母のもんぺにしがみつきながら、その言葉をはっきりと聞いた。じいさんもそばにいた。

島子の父親は、出征の見送りの折、別れ間際に発した最後の言葉が「好きで行くのやない。」であった。島子の父は、働き者で辛抱強い人間であったのであろう。この言葉は、島子が聞いた父の「初めて」の愚痴だったのである。父の「好きで行くのやない。」という言葉には、妻と我が娘の島子、そして高齢の父親を残して戦地に赴かなければならない無念さを看取することができよう。おそらく、島子の父親が出征したのは、戦況があまり芳しくない時期であったと考えられる。「大きな声で言えんが、この年になって、子供を置いていくのは、つらいわい。」という言葉は、抗えようのない不条理に対する自分自身の無力さを嘆く、父の声にならない最後の悲鳴としても聞き取ることができよう。父の出征当時、小学校三年生である島子の年齢の子供を持つ男性までもが、兵士として徴用され戦場へと出征しなければならない戦況の時期であったことは事実である。

島子の父が、出征の直前まで最も気にかけていたのは、我が娘である島子のことだったのではないだろうか。少なくとも、「好きで行くのやない。」という言葉に込められているのは、ただ単に、自分自身が戦争に行きたくないということではない。それは、自分が戦争に行った後の残された家族の生活を憂い、子供の将来を思う親心の表出であり、可愛い我が子を置いていくのが心の底から辛く悲しいのである。こうして考えると、父の別れ際の最後の言葉である「好きで行くのやない。」は、島子を思うが故の心の叫びだったと把捉することができる。

島子達の住む地域は、小さな村とはいえ駅には出征する人や見送りの家族等の多くの人々でごった返していたと思われる。父の「大きな声で言えんが」という言葉は、戦時中の日本では、出征する人間の「好きで行くのやない。」は、他の人々の耳には決して入れられない発言だったからである。大人達の戦争に対する言動を、日常の中で否応なく目の当たりにしてきた幼い島子であっても、「戦争に勝つためというなら、もう言葉はなかった。」ほどの時勢である。そのようにして考えると、この時の父の声は、かなり小さかったはずである。にもかかわらず、島子は、父の「その言葉をはっきりと聞い」ている。この時の島子は、母親の「もんぺにしがみつ」いている。おそらく、今、目の前で起こりつつある現実――自分自身が生まれてから、片時も離れず、自分を大きな包容力で温かく包んでくれていた父が、戦場に出征する。もう二度と会えないかも知れないという現実――を必死で受け止めようとして、母親のもんぺに必死の思いでしがみついているのである。小学校三年生の島子の身長を考えると、島子の顔は、母の腰から胸元の辺りの高さであると推測される。その位置で、父の小声で話す言葉を「はっきりと」聞き取っているということは、周囲の人々を留意しながら父は母にかなり接近し、そして少し腰をかかめながらその言葉を投げ掛けたのだと考えることができる。

Ⅲ．島子の言葉と父の言葉の重なり

広瀬節夫は、島子の発言である「好きで行くのやないよってに」について、次のように述べている。[11)]

次に、Ⅱの場面においては、戦場に行く父の心情を思い出しつつ、島子が山へ行く母牛の心情を思いやる言葉、「好きで行くのやないよってに」に注目すべきである。それは、父親が戦場へ行くとき、島子が母のもんぺにしがみつきながら聞いた言葉、「好きでいくのやな

い。」と重なっていた。そのとき、祖父も同じように聞いた言葉であった。

ここで広瀬は、島子が「山へ行く母牛の心情を思いやる言葉」である「好きで行くのやないよってに」と、父が「戦場に行くとき、島子が母のもんぺにしがみつきながら聞いた言葉」である「好きでいくのやない。」との重複について指摘している。

つづいて浮橋は、島子の言葉と父の言葉との重複について、次のように述べている。[12)]

①の「好きで行くのやないよってに」まで読んだ時、読み手は、「母牛はつらいだろう、なるほど島子の言うとおりだ」と考えるだろう。そしてじいさんも「母牛のつらさ」がわかって「だまってしまった」のだと思うのだろう。

ところが数行あとで、その見方の浅さに気づかされる。島子は母牛の現実にのみ即してそう言ったのではない。出征した父の心を重ねた言葉だったのだ。母牛の中に父を見いだした、そういう言葉であったわけだ。

人間である父と動物である母牛とが、同じレベルの言葉で何かを訴えることはあり得ない、というのは理屈だけれども、また現に母牛と父とアナロジカルに物を思っているわけではないけれども、島子の心象の中で父と母牛がダブらされていることによって、母牛の苦労の意味を深くし、同時に、戦地にある父の苦労をもするどく照らし出したのである。

ここで浮橋は、「島子は母牛の現実にのみ即してそう言ったのではない。出征した父の心を重ねた言葉だった」と把捉している。島子の言葉は、父の言葉と重複想起させることにより、「島子の心象の中で父と母牛がダブらされていることによって、母牛の苦労の意味を深くし、同時に戦地にある父の苦労をもするどく照らし出し」ている。島子は、この言葉を祖父に向けて投げ掛けている。「好きで行くのやない」ことが、どれ辛いことなのか、親子が「別れ別れになる」ことが、どれ程悲しいことなのか、「島子の父」の親である祖父だからこそ、他の誰よりも心に響かせ、その言葉を理解できるはずなのである。

島子が敢えて口に出さなくても、祖父には島子の言葉が、自分自身と父との関係をも包含した意味合いでの発言であることが充分伝わっているはずなのである。むしろ、直接的な言語表現として父を話題に出さないことで、より強く父との別れを想起させることとなっているのである。

こうした島子の思いを受け、祖父の芳太郎は次のように語り始める。[13)]

「山へ行くのが、牛の仕事や。」

芳太郎じいさんは、再び指を動かし始めた。

「働くのが仕事じゃ。それに、こっちはいやでも、山では、北村はんの家族があてにして待っとる。今は非常時や。戦争には勝たんならん。おけのやつは、うちの牛であっても、北村はんのものでもある。いや、日本の牛でもあるのやで。ええか島子。」

親子の別離が辛いのは、祖父にも痛いほど分かっていることである。なぜならば、祖父自身も息子である「島子の父」と親子の別れを経験しているからである。作品の本文中には具体的には記述されてはいないが、ここに「もう一つの親子の別離」が存在していることも事実なのである。

この場面の祖父は、明日、山へ行く母牛の「おけかぶり」のために、夜なべをして四本の足にぴったり合うように藁靴を編んでいる。一方の島子は、祖父のそばで屈み込みながらそっと話し掛けているのである。島子は、藁靴を編む祖父の「ひからびたじいさんの太い指先」をじっと見つめながら話している。「ひからびたじいさんの太い指先」は、長年辛抱を重ねながら懸

命に仕事に打ち込み生きてきた苦労人の歴史を物語っている。特に、島子の父が出征した後のこの一年間の祖父は、高齢ながら家族の柱として働きづめの日々であったであろう。

祖父は、孫娘の島子の発言の主旨を十分理解しつつ、「仕事」ということから「戦争」へと話を繋げていくことで、そばで屈み込んで聞いている島子に対し、静かに語り掛けながら返事をしたのである。

戦争に「好きで行くのやない」と言い残して出征していった父のことを理由に、島子は何とか母牛を山へ行かせないように腐心している。それに対して祖父も、山へ行く母牛と戦場に旅立った島子の父とをオーバーラップさせながら説得を試みるのである。つまり、「おけのやつは、うちの牛であっても、北村はんのものでもある。いや、日本の牛でもあるのやで。」の部分がそれである。「おけのやつは」を「島子の父」に、そして最後の「いや、日本の牛」を「日本の島子の父」に置き換えることを想起させながら語り掛けているのである。島子と祖父は、お互いの言いたいことも、お互いの心持ちも十二分に認識しながら静かに語り合っている。島子は、祖父の返答を聞き、「もう言葉はなかった」のである。

こうして島子には、母牛の山行きを止めさせることはできなかったのである。「今年だけは、おけちゃんをかんにんしたってほしいねんけど。」という願いは、残念ながら叶わなかったのである。

Ⅳ．終わりに

本稿では、「国語教科書教材基礎研究」の一環として、「山へ行く牛」の成立過程、作品「山へ行く牛」と時代性、「好きで行くのやないよってに」と「好きで行くのやない」、島子の言葉と父の言葉の重なりについて考察してきた。今後の研究では、さらに以下の点を中心に考察を進めていきたい。

１、山行きの道中の島子について
２、母牛との別れについて
３、母牛の涙と島子の後悔について

[引用文献]

１）萬屋秀雄稿「解説　作家と作品について」『偕成社の創作文学　山へいく牛』、偕成社、昭和52（1977）年11月、210～211頁
２）川村たかし稿「『牛』が象徴するもの」、『学図　教科研究国語・小学校編』No.50、学校図書株式会社、昭和58（1983）年2月、1～2頁
３）同上書、3頁
４）前掲2）の文献、5頁
５）浮橋康彦稿「文学教育についての私見」『日本文学』25巻8号、日本文学協会、昭和51（1976）年8月10日、4頁
６）安藤操稿「文学『山へ行く牛』の授業（高学年）」『力を伸ばす文学・読書の授業』、日本書籍株式会社、昭和57（1982）年7月5日、187～188頁
７）岩井幹明稿「『山へ行く牛』－感動体験を伝えあい、ひとりとみんなで読む文学の授業を求めて－」『季刊　文学教育』、日本文学教育連盟、昭和56（1981）年1月、99頁
８）立尾保子・藤井英子稿「教材『山へ行く牛』の課題学習の実践（六年）」『国語教育科学叢

書３　国語科課題学習の実践』、国語教育科学研究所、昭和61（1986）年7月、212頁
９）川村たかし作「山へ行く牛」『みんなと学ぶ　小学校国語六年・下』、学校図書株式会社、平成15（2005）年7月1日、10頁
10）同上書、9～10頁
11）広瀬節夫稿「文学教材の研究」『小学校国語科教育法』、建帛社、平成4（1992）年4月15日、55頁
12）浮橋康彦稿「文学言語の可能性を学ばせる」『日本文学』26巻3号、日本文学協会、昭和52（1977）年3月10日、4頁
13）前掲9）の文献、11頁

A Researching Takashi Kawamura

through Japanese Language Teaching Materials "Yama he iku Ushi"

Hiroshi OHTSUKA

(Received October 4, 2012)

Abstract

Takashi KAWAMURA (1931-2010) was born in Nara Prefecture. The first recorded example of his work *Yama he iku Ushi* ran in August 1972 edition of *Nihon Jidou Bungaku*. Later,in April 1956, he had his first work, *Yama he iku Ushi* officially published. A fuller, revised version of *Yama he iku Ushi* was included.

The textbook version of *Yama he iku Ushi* was published by Gattkou Tosho Publications in 1977. It was selected for the first time as a teaching material for students aged 12 years or older. Since 1977, the textbook has been reprinted a number of times.

The main issues examined in the research of Takashi Kawamura, were the historical backdrop that the story was set against; the differences between the characters in the original version of *Yama he iku Ushi* and those in the school textbook version.